

2021年7月25日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「御万人ぬ救い」

聖書：ローマの信徒への手紙10:5～13

「御万人(うまんちゆ)ぬ救い」とは、「全ての人の救い」ということ。全ての人の救い、全ての人が救われる…。このことは中々受け入れがたいことである。何故ならこの世はそのことと相反する社会だからだ。この世においては、“救われる人”と“救われない人”に分けられる構図になっている。

律法を大事にしてきたユダヤ人は、律法を守りきることによって救われると信じてきた。律法を守らない者は救われない。たとえば安息日を大切にし、一切の仕事を休む。実際には休むことの出来ない仕事は存在するわけだが、羊飼いの仕事がそう。

安息日とは言っても羊の群れに水や草を食べさせないわけには行かない。羊飼いの仕事は、自ずと貧しい者たちの仕事となっていく。律法を守りたくても、貧しいがゆえに守ることが出来ないという人々は、その他にもいたであろう。守ることが許されず、救いから漏れていく、強制的に救われることが許されない立場に置かれている者たちはいたのである。

その救われる、救われないという構図が、当たり前のように思われた社会の中で、《だれが天に上る》とか《だれが底なしの淵に下るか》と言ってはならないと言う。すなわち、だれが救われ、だれが救われない…とは言ってはならないというわけ。9節《口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われる》。「口で…心で…信じる」という言い方は、口で、心でなら“誰でも出来る”ということの意味する。貧しくて羊飼いの仕事を余儀なくされた人々も救われているということ。全ての人が、うまんちゆが救われることを表している。

御万人ぬ救いとは、この世に争いをもなくし、戦争はなくなるという思想に繋がるものでもある。そういう意味でも一人でも多くその神の愛に触れて頂きたい。(神谷)